1977年度秋季研究発表会

1977年秋季研究発表会は“実践的OR”という特別テーマのもとに，研究発表は10月3，4日広島大学工学部において，見学会は10月5日東洋工業，宮島見学という日程で行なわれた．発表件数は109件（うち特別テーマ8件，部会報告10件），参加者は会員181名，学生会員36名，非会員22名 計239名，見学会参加者は30名，懇親会参加者は90名と見学会を除いては盛会であった．以下，実行委員会および出席者の報告・感想をお届けします．

発表会準備 ’76年秋季研究発表会を中部支部で引き受けた後，つぎは中・四国支部の順番だということで準備に入ってから2年近くになるでしょうか．名古屋，早稲田における発表会への実行委員有志による発表会，懇親会，見学会等の調査，理事会で正式に決まったあと，開催地を広島，岡山，高松等のどこにするか議論，本部からの要請で春に変更するかどうかの問題等々，いろいろなことがありましたがやっと終わりました．実行委員の皆さまご苦労さまでした．協力を仰いだ本部その他の方々お世話になりました．おかげで成功裡に発表会を終えることができました．

アブストラクト4ページ 今回の発表会はいろいろ新しい試みをしましたが，その1つは従来アブストラクトの研究発表1件あたりのページ数が2ページだったものを4ページとしたことです．その結果，発表件数が109件と多かったこととあいまって，非常に立派な(内容とも)アブストラクトができあがりました．こんなアブストラクト集はOR学会創設以来はじめてではないでしょうか(文献としても価値があると思います)．そのうえ参加費は従来通りですから．

この4ページ原案に対しては，実際に発表者は4ページ書いてくれないのではないか，などいろいろ意見がありました．

事実頭のよい参加者は一行おきに書いて4ページ送ってきたり，2ページのまま送ってきたりしましたが，これらはすべて返送して（通信費が高くつきました）書き直してもらいました．しかしほとんどの発表者は4ページの原稿を送ってくださり，このようなアブストラクト集ができあがりました．

残念なことは字が乱雑な原稿が少しあったことで，これらはすべて返送して書き直してもらおうかと思いましたが，事務量が多くなるのでそのままにしました．

今後われわれの気をつけることではないでしょうか．

発表時間30分 従来の研究発表は一般発表とペーパーフェアで，一般発表の発表時間は発表15分，質問を含め20分でしたが，今回は一般発表のみとし，発表時間は23分，質問を含め30分といたしました．ペーパー・フェアはOR学会の1つの目玉で，これを行なわないのは残念でしたが，1回抜けたことによりペーパー・フェアの価値が再評価されるのではないでしょうか．発表時間30分は多くの発表が聞かれない，冗長すぎるのではないかなどの意見がありましたが，ORも専門分野が分科してきたことと，じっくり発表を聞いてもらいたいということで30分案を実行することにしました．さて実行するとなると，6つの会場の配置，アルバイト学生数，オーバーヘッドプロジェクターの確保，プログラム編成など思わぬ労力が増加しましたが，いちばん困ったのは座長依頼で，発表会場が6会場になったため座長が38人も必要になったことでした．大部分の方からは，座長依頼に対しすぐ諾否の返事をいただいたのですが，一部にいくらたっても返事がない，電話しても不在，断わるならつぎの方に依頼するのにそれができない，これには大変疲れましたが，実は私も返事の遅れるその1人ですから，とんだところでわが身にかかって今後の教訓になりました．ともあれ，一部には2日間にわたり座長をつとめていただいた座長の皆さん，お忙しいなかをお世話になりました．

部会報告1会場 今回の発表会では，部会報告は学会の1つの成果でありいろいろな部会報告が聞けないのはおかしいという理由で，部会報告に1会場をもうける直列方式を取りました．これについても，部会報告の聞き手がないのではないかという意見が出されましたが，幸いその意見は結果として杞憂に終わりました．

発表会場7会場 発表時間30分案実施の結果，研究発表6会場，特別講演会場と7会場が必要になりました．広島大学は3,4年後には移転するので，2度と現在の工学部では研究発表を行なうことができないという理由で，工学部を会場としましたが，移転前で新設が許されないので，迷路のような会場間の通路，休憩室の不備など参加者の皆さんにご迷惑をかけました．

特別テーマ“実践的OR”の発表件数は8件と寂しかったが，特別テーマ会場は業務に密着した論文が多く，100名程度の参加者で盛況でした．その他では，数理計

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

画20件，信頼性18件，待ち行列16件，統計に関する研究9件，動的計画法6件，社会システム，一般システムに関する研究各5件，シミュレーション4件，グラフ・ネットワーク4件，ゲームの理論33件と，ORの各方面にわたって発表がなされた．

会場が多いので，あるいは参加者の非常に少ない会場があり発表者に迷惑をかけるのではないかと思いましたが，結果はそのようなことがなく，ほっとしました．

パネルディスカッション　特別テーマ“実践的OR”の成果はORの実践をテーマにしたパネルディスカッションに結集され，300名近い参加者の前でORに対する自己の考え，体験を率直に披露されたパネラー(朝尾　正，柏井澄夫，唐津　一，小玉陽一，森村英典）の諸氏，これらパネラー諸氏の諸説を取りまとめられた絶妙な司会(森口繁一氏)は2時間半にわたるディスカッションを大変充実したものといたしました．司会者は最後に適切な表現をもって，コミュニケーションをしっかりすることが実践的ORの重要な要素であること，学校教育にあっては物事の本質を把握する力を養うことが重要であること，従来ともすれば手法の細部に偏した傾向が散見されたOR手法の本質を明らかにすることが大事であること，今後「大人のOR」として発展することを願いたいということでしめくくられました．

特別講演　「瀬戸内海のエコシステム的展望」では，最近各地で問題になっている赤潮の発生原因の究明を含めた豊富な研究成果を，問題が非常にむずかしい理由等を率直に表現しながら発表されました．

懇親会　約90人の参加で近来にない盛会でした．学会としては珍しく“きき酒”のサービスを行なうなど，いささか実行委員会のサービス過剰になりましたが，おかげで参加者は非常に満足している様子でした．

見学会　学会の見学会は参加者が少なく，廃止したほうがよいなどの意見も出ていますので，今回は実行委員会の誠意を見せて盛会にしようと試みましたが，東洋工業の参加者が30人，宮島への参加者が数人で，今後の見学会の運営には考えさせられるものがあります．

〔アンケート〕

今回の発表会の新しい試みに対して，参加者のアンケートを取りましたので最後に報告いたします．参加者のわりに回答者が少ないのは寂しいのですが．なお回答者の中に実行委員はおりませんので念のため．数字は人数を示す．

1.　総合的にみて
　(a)　従来の形式がよい　16
　(b)　今回の形式がよい　29
2.　ペーパー・フェアについて
　(a)　あったほうがよい　33
　(b)　一般発表のみでよい　20
3.　発表時間について
　(a)　20分がよい　13
　(b)　30分がよい　41
4.　特別講演について
　(a)　特別講演2件がよい　11
　(b)　特別講演1件と他の催しがよい　37
5.　パネルディスカッションについて
　(a)　よかった　39
　(b)　以下の点を改善すべきである
　　1)　テーマ　5
　　2)　人　選　5
　　3)　時　間　2
6.　アブストラクトのページについて
　(a)　2ページがよい　19
　(b)　4ページがよい　32
7.　アブストラクトを4ページにする場合，現在の参加費を最低1,000円以上値上げしないと発表会の運営が維持できません．これについて，
　(a)　参加費を値上げしても4ページがよい　26
　(b)　値上げするなら2ページがよい　16
8.　部会報告について
　(a)　従来の形式がよい　7
　(b)　今回の形式がよい　21

(実行委員会副委員長　青木兼一)

大会雑感——その1——

今回の大会では，筆者は17の一般発表とパネル・ディスカッションを聴講する機会に恵まれた．1人の人間が物理的に聴講しうる研究発表の最大数は18だから，これは筆者としては空前の高出塁率である．第1日目はあいにくの雨で，会場外へ脱出する意欲をそがれたこともこの一因であるが，快晴の第2日目も最後まで研究発表につき合う気になったのは，アブストラクトが一挙に2倍の4ページに拡張されたことと，1人あたりのもち時間が10分間延長されたことが大きく作用している．従来の(20分，2ページ）方式だと，筆者程度の頭の人間には簡潔すぎて，とうていその場で内容を正しく理解することは不可能だとの諦めが先に立ってしまうのであるが，(10分，2ページ）の上積みは，内容を理解しようとする意欲を高めるうえで大きな効果があった．また，立場を入れかえて発表者の側に立ったときも同じような印象をもった．学会運営の立場からは，会場，コストの面の制約も考慮したうえで従来の方式と新方式の得失を，それこ

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

そOR的手法を用いて計測し，慎重に意思決定することが必要となるであろうが，たとえばアブストラクトは2～4ページといった柔軟性をもたせるなど，新方式の長所を生かす方向で検討されるよう望みたい．

一般発表については，筆者は数理計画法と部会報告を中心に聴講した．まず数理計画法についていえば，今回は従来の大会に比べて発表数，聴講者数ともにめだって少なかったように思う．発表の質については，会場から厳しい批判を受けたものもあったが，それはともかくとして，中森真理雄，韓豊太郎氏の“地理情報を位相的に扱う算法・データ構造”と，大岩元氏の“最適化における非線形連立方程式の一解法”は，そのアイデアの斬新さと将来性の点から，筆者にはきわめて興味深かった．

一方の部会報告についていえば，メタ理論からドロドロの現実問題まで，perfectly well-posed problem から ill-posed problem まで，数量的接近から文学的接近まで，多種多様なアプローチを許容するOR学会の包容力の大きさが浮き彫りにされており，学会の現状を知るうえできわめて有益であった．

学会創立20周年を記念したパネルディスカッション「ORの実践」は，そうそうたるパネリストが現場での貴重な体験を披瀝された興味深いものであったが，予定された2時間20分という時間がたちまちのうちに過ぎてしまい，せめてもう30分あったならば，と感じたのは筆者1人であろうか．　（筑波大学　今野　浩）

大会雑感——その2——

初日，広島は雨であった．天候には恵まれなかったが会場は午前中から，かなり活気にあふれていた．

私はまず，C会場(分野：数理計画，D.P.，グラフ，ネットワーク）で発表を拝聴した．ここでは，中森真理雄氏（東京農工大学）の「地理的情報を位相的に扱う算法・データ構造」と田口東氏（東京大学）の「容量制約のある離散1－1連続系における最大流問題とその数値解法」が，個人的にも興味があり，印象に残った．

とくに田口氏の発表は前回のつづきともいうべきもので，前回を拝聴していたこともあって，いっそう興味深かった．また会場での質問や討論も多かったようである．

午後には今大会のよび物であるパネルディスカッション「ORの実践」があり，期待にたがわず，ここ数年における大会特別企画の中で，もっとも盛り上ったものとなった．この雰囲気がそのまま持ち越され，夕方の懇親会も非常に盛会であった．

2日目は快晴で，午前中，私は自分も報告する義務があるので，F会場での部会報告を拝聴した．いろいろな部会の報告を聴かせていただいたが，なかでも森雅夫氏（茨城大学）の「計算機システムにおける確率モデル研究部会」の報告は多くの人々の興味と関心を集めていたようである．

これまで，部会報告にはあまり人が集まらないのが通例であった．それに今大会のように，1つの会場で他の発表と並行し，午前午後にわたって行なわれた例はない．そこで参加者が極端に少なくなるのではないか，と事前に心配されていたが，これは杞憂であった．ただ部会報告という理由からか，座長がいなかったが，やはり座長がいて，進行に十分注意しないと時間が守られない場合がある．

ところで前日のパネルディスカッションの余波が残っていて，A会場（分野：社会システム，一般システム）での鈴木義一郎氏（統計数理研究所）「地域の機動性」では，同氏がパネルディスカッションに触れて発表されたので，活発な議論がかわされた．多くの人々が議論に参加したせいもあってか，終わりの拍手の音は一段と大きかった．

つぎに今大会の研究発表の方式について感じたことを述べさせていただきたい．今大会の大きな特徴は，まずペーパー・フェアがなく，普通の発表形式のみであったこと，発表時間が従来の20分よりも長く30分であったこと，さらにアブストラクトの量が倍の4ページであったことである．会場で耳にした意見では，おおむねこの方式はよい評価を受けていたようである．とくに発表の内容がきちんとしたものである場合は，よりいっそうその効果が出ていたように思われる．また，図表による表現が必須の場合は今大会の方式のほうがよさそうで，アブストラクトに図表が過不足なく，のびのび入っていた印象を受けた．

もっとも，いいことばかりではなく，かえって冗長さが増し，発表時間の長さやアブストラクトの長さを生かしきれなかった発表も見受けられた．

今後どのような方式をとるかについては，いろいろな面から議論されなければならないだろう．私の乏しい経験でも普通の発表形式のときとペーパー・フェアのときとでは，アブストラクトの書き方を変えたほうがよいように思うので，この点を含めて考えると，なかなか微妙な問題でもある．形式をそう固定化しないで，今大会のような場合があってもいいし，2ページか4ページのどちらかを選択できるようにするのも一案かと思う．

ともあれ，盛況な大会であった．最後に中国四国支部関係者の皆様のご尽力に，深く謝意を表しておきたい．

（東京大学　腰塚武志）

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．